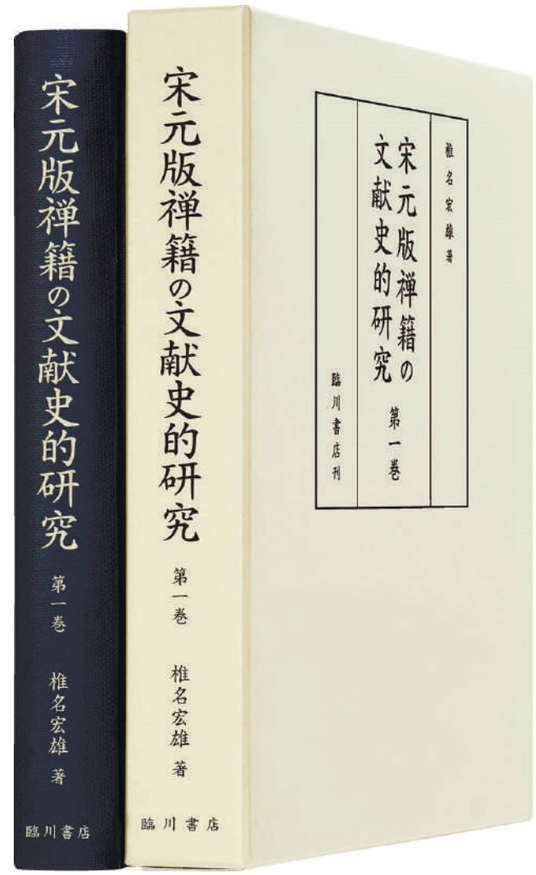
宋元版禅籍の文献史的研究

全三巻

椎名宏雄 著

臨川書店



■A5判・クロス装・函入・平均850頁
■第1回配本 **第1巻 税込30、800円**（28、000円+税）
■各巻予価税込30、800円（28、000円+税）
■ISBN978-4-653-04720-9（セット）C3015

2023年秋刊行

著者の宋元版禅籍の文献史に関する研究を全3巻にまとめる。論文約100、解題類130、目録・講演集10、総計240編に及ぶ宋元版禅籍の文献史に関する著述を伝記・系譜、燈史、清規、綱要、詩文、語録、偈頌、公案、注解、目録、講義録に分類しまとめた研究者必携の書。

株式会社 臨川書店
〒606-8204京都市左京区田中下柳町8番地 ☎075-721-7111　FAX075（781）6168
E-mail kyoto@rinsen.com　URL http://www.rinsen.com

推薦文

宋元禅宗研究必携の書

臨済宗妙心寺派宗務総長　**野口善敬**

語録などの「文献」は、論文を書くための材料に過ぎないと見くびっている人がいるかも知れない。だが、文献こそは論証の基盤であり、もしも使用する文献資料に瑕疵があれば、論理そのものが根底から崩壊してしまうことになりかねない。禅宗の研究に用いられる文献、特に宋代以降のものについては、『大日本続蔵経』などの活字本が、ともすれば無批判に用いられているが、底本の版本は不明なものも多い。また近年、研究者が使用しているネット上のデータベースも、ほとんどが活字本に拠っており、必ずしも正確な資料とは言えない。椎名先生が手掛けられた宋元版の禅籍資料についての研究は、文献史の重要性を示す金字塔であり、禅学研究者にとって禅籍文献を訪ねる重要な道標なのである。

椎名宏雄著『宋元版禅籍の文献史的研究』を推薦します

駒澤大学総長　**永井政之**

二〇世紀初頭における敦煌出土禅文献をめぐる研究が、中国初期禅宗のイメージを大きく塗りかえ、爾来、研究者に「文献研究」の重要さを再認識させるに至ったことは周知の事実である。

一方、本邦における古典籍刊行をめぐっての研究を俯瞰すると、個別の研究のほか、川瀬一馬氏に代表される労作があるものの、所謂「禅籍」の分野については必ずしも十全とは言えない恨みがあった。

その間隙を埋めるべく著者が、半生を費やし研究された成果を、『禅学典籍叢刊』全一三冊（柳田聖山先生と共著）、『五山版中国禅籍叢刊』全二二巻（いずれも臨川書店刊行）として世に問われたことは耳目に新しい。

それらは一部の好事家等が収集した文化財的存在とも言いうる稀覯本を、研究者をはじめとする許多の人々に知らしめた画期的な業績である。今後、中国・日本の禅宗を研究するための基となることは疑いない。

今般上梓の『宋元版禅籍の文献史的研究』は、両『叢刊』で扱った禅籍についての解題をはじめとして、長年の禅籍研究によって解明された異本の体系化、禅僧の伝記、思想など、多岐にわたる諸論考を網羅している。

まさしく両『叢刊』とともに「椎名禅学」の集大成と言ってよい。斯学研究者必携の書であり、江湖に推薦させていただく由縁である。

各巻目次

第一巻　序論／伝記・系譜／燈史／清規／綱要
第二巻　詩文／語録
第三巻　偈頌／公案／注解／目録／講義録

組方見本（版面実寸の 100%）

知るとおり、この語録は金沢文庫のみに伝存する天下一本の古写本であり、一四世紀初期ごろの邦人による筆写といわれる。[31] したがって、本書は禅師が直接に依用した禅籍ではないが、ほかに異本が皆無の現状であるから、この筆写本の底本を想定した典拠指示とみられる。ところが、「遷居頌」の収録だけに限れば、一四世紀を遡る成立年代のたしかな古文献が他にも存在するのである。それは、『宝慶四明志』（一二二八）巻一三の記録である。[32]

問題は、これら両書中の「遷居頌」と禅師の引文との貸借関係いかんにある。そこで、『正法眼蔵』行持上の引文と右の両「遷居頌」とを比較すると、両頌ともに一、二字の相違があり、完全に一致するものはない。すると、これら両書ともに禅師依用の典拠として安易に特定できないことになろう。では、実際の典拠は何であったのか。

それをさぐるため、右の「行持上」の引用箇所に目を転じると、ここは禅師が法常の古淡な行持を讃仰する部分なのであるが、それはこの箇所のみならず、『永平広録』巻一の上堂、同巻四の上堂、同巻八の法語などにもみられる。そして、これらの引文中には、典拠とされる諸禅籍中にもみられない独自の記事があることに気づく。たとえば、「行持上」では法常の生前と寂後の事跡に関するつぎの二つの記事である。

師の坐禅には、八寸の鉄塔一基を頂上におく、如戴宝冠なり。この塔を落地却せしめざらんと功夫すれば、ねぶらざるなり。その塔、いま本山にあり、庫下に交割す。……(1)

生前には一虎一象、よのつねに給事す、あひあらそはず。師の円寂ののち、虎象いしをはこび、泥をはこびて師の塔をつくる。その塔、いま護聖寺に現存せり。……(2)

これら独特の記事は、いずれも禅師が護聖寺に現存することを断言して紹介しているところから、おそらくは禅師じしんが護聖寺の滞在中に見聞したものに相違ない。特に如戴宝冠の鉄塔は庫院に置かれていたことさえ知られる。してみると、禅師は大梅山で法常に関する現存造形物を見聞し、その由来を示す古記録や伝承を知って大きな感動を受け、それらを脳裏に刻み、あるいは克明に記録したのではないだろうか。法常の場合と同じく、如浄に関する引文